

# 絵描きの青春

千代田さん

大きな画用紙を携えた私は、区民センターの扉を開けた。中には、既に多くの人々が、ホワイトボードに何か書きついたり、丸椅子に腰かけ仲良さげに談笑したりしている。さあ、いよいよ始まるぞ。私は、手のひらにじんわり汗をかいているのを感じた。

私は、一年ほど前から大きな絵画……いわゆる「美術」と言われる分野に足を踏み入れ、出品を続けていくうちに、様々な美術団体があることを知った。全国規模の公募美術団体は、各都道府県に支部を持ち、春先に開催される本展に向けて、出品予定の作品を持ち寄り、支部長直々に各々の作品の講評をするのだ。今日が、その初日であった。

私の講評の番は八番目であった。従って、それ以前の出品者の作品の講評も、どさくさ紛れに聞くことが出来る。後ろの丸椅子に腰かけ、亀のように首を精一杯伸ばして彼らの作品を見た。

彼らの作品は、見事であった。特に、トップバッターの出品者……仮に、Yさんという。彼の作品は、誰が見ても頷かざるを得ない緻密な作品であった。これを、どう講評するのか？ べた褒めか？ だが、先生は厳しかった。

「この作品だけ見ると、綺麗で素晴らしいと思うでしょう？ でもね、こういう繊細な画は隣に強い絵が来ると、負けちゃうの。だから、作品がどの位置で展示されても負けない絵を描かなくてはならないんだ」

その後、先生はYさんの作品に対する指導を二つ三つした。殆ど粗探しと言っても過言ではなかった。けれど、講評を終え戻ってきたYさんは、満足そうな笑みを浮かべていた。私は、すかさず「凄いですね。感動しちゃいました」とかなんとか、はしゃぎながら言った。

その後も講評は続いたが、五人目辺りともなると、流石に場の雰囲気慣れてきて、講評もそこそこに、隣の席のお爺さんとお喋りに興じた。お爺さんは、会友だという。

「会友ですか。凄いですね。ずっと絵画をやられてこられたんですか？」

「いいや、定年後に何かせにやっと思って思ったんだが、会社勤めが長かったもんで、これといった趣味もなくなつてなあ。そんな時、新聞広告だったかな、とにかく何かのピラに、絵画教室生徒募集つう広告があつてさ。しかも、先生が若い姉ちゃんだったわけさ。後は、分るだろう？」

そう言うと、お爺さんは、「ヘッヘッヘ」と笑った。私も、あははと笑った。彼を野卑だとは思わなかった。もし彼が、「ルノアールが……」とか言い始めたなら、私は彼とこれ程までに急速に距離を縮めることは出来なかったであろう。私はすかさず財布を取り出した。だが、生憎、名刺を切らしていた。私は、「良い縁を逃しちまった……」と、心の底から後悔した。

講評はその後も続いた。何人目かの出品者の絵は、どこかの教会をモデルに描いた油絵だった。屋根の角度が、少しだけ、画的にズレていた。そのことに真つ先に気付いたのは、やはり、支部の講師の先生であった。仮にA先生としよう。A先生は、人格円満、先生が描かれる作品にも、彼の繊細であたたかな心の豊潤さが見て取れた。そして同時に彼は、職人でもあった。僅かなデッサンの狂いも見逃さない。具象画家になるために生まれて来た様な人であった。初めて等身大サイズの人物画に挑戦した私は、一見穏やかそうなA先生の鋭い講評を、密かに恐れていた。

「いやいや、A先生、それは違うんじゃないか？ 屋根はこうでしょう？」

と、A先生の講評を遮り、誰かが言った。A先生は明らかに怒気を孕んだ声色で、「違う。これは二点透視図法なのだから……」と、大きな声で言った。二人とも、真剣な眼差しで見えない火花が散っている。ここで彼らの言葉の応酬を詳しく表わせないのは、私が、彼らの言葉の半分も理解できなかったためである。

では、その時私が何をしていたかと言うと、出品者の作品をもっともらしい表情で見つめては、かの文豪よろしく顎に手を当て、したり顔で頷いたり、「そういうことかあ」と、口の中で唱えたり、「感想しました。凄いですね」と、出品者の元へ駆け寄ったり、面白いでもないのに、不気味な含み笑いを浮かべていたり。要するに、私は何もしていなかったも同然だった。

そうこうしているうちに、いよいよ私の出番が来た。緊張していたが、平常心であった。

元から頭に何も詰まっていなかったから、頭が真っ白になりようがないのだった。私は、A先生、支部長の間に腰を下ろした。

今回、私は、色鉛筆と水彩マーカーを用いて狐の面を被った袴姿の青年を主人公に、背景には薄ぼんやりした色とりどりの提灯を描いた。縦135cm、横110cmの作品だ。ここへ来るまで、私は、「人物のデッサンが出来ているか心配だ。あんまりにも滅茶苦茶で、もう一度描き直して来いと言われたらどうしよう」と、くよくよ考えていた。

しかし、いざ講評を受けてみると、なかなか、感触は悪くなかった。日展系と呼ばれるこの絵画団体は、その流派の特性上、スーパーリアルな風景画が多いのだが、その中で、私は、たった一人、「妄想を描く出品者」だった。今も公募団体について管見の私だが、一年前は、もっと酷かった。何と、初出品作であるにもかかわらず、何の下調べもせず、顔中に入れ墨を入れた厳つい男の絵を出品したのだ。これは私のいわゆる……十八番であった。つまりその時の私は、極めて主観的で、「描きたいものを描き、出品する」というシンプルな法則にのみ、基づいて行動していたのだ。

「挑戦的で、寧ろ好感を持ったよ」と、後に先生は慰めてくださったが、逆の立場だったら、「この出品者は余程の世間知らずの自信家か、はたまた、狂人であろう」と、思ったに違いない。

実際、審査の折、「この絵を入選させて良いものか」という議論にまで発展したらしい。だが、「こういった作品も、結果的に若い世代を引き込む足掛かりになるやもしれぬ」と、その「アイデア・奇抜さ」のみに於いて、評価を受けたのである。

さて、いよいよ私の講評も佳境に差し掛かって来た。A先生は、「人物の手首が少し太いね。細かい様だけど」と遠慮がちに言った。すると、左隣の支部長が、「でも、狐だからなあ。狐の手と思えば、何ともない」と混ぜっ返し、どっと笑いが起った。私も笑った。支部長も、A先生も、けらけら笑う出品者の方々も、皆、優しい。それが何だかとても嬉しかったのだ。

それにしても、絵画団体とは不思議な所だ。役員、会員、会友、一般と、序列があるところは会社と類似している。しかし、賃金が発生していない以上、会社ではなく、組織の一つに過ぎない。かといって、趣味とも違う。趣味とは、描きたいものを、気ままに描く

事だ。だが、ここでは、必ずしもそうはならない。皆、創作上の苦しみを抱えながら、描く。毎日、毎日、一心不乱に、時に死に物狂いになりながら、描く。これは最早、趣味の域をとくに超えていると、私は思う。学校？ そうだ、学校だ。性別も、生きてきた年代も、職種も、出身地も、何もかもが異なる者共が、一つの作品について各々論じ合う。互いの健闘をたたえ合い、ひっそり技を盗み、時には喧嘩だつてする。これを学び舎と言わずして、何と言おうか。

帰りの電車内で、七十二歳のボーイフレンドからメールが入っている事に気付いた。「研究会は、どうでしたか？」と。彼とは、東京の美術館で一度会ったのみだ。それでも、私達は、日に一度、必ずメールを交わしている。絵画中心の話題に終始すると思いきや、いつしか、私は家庭の事や困った友人、果ては最近描いている成人向け漫画の細部に至るまで彼に打ち明けていた。「あーあ、バカだなあ」と笑う彼の表情が、目に浮かぶ。私にも、少々遅れた青春がやってきた。そう、強く感じる。

狐面の絵画は、入選を果たしたあかつきには、桜が満開の頃、新国立美術館にて展示される。落選したら、きつと一日くらいは落ち込むだろう。泣くかもしれない。けれど、翌日には、また、あの小汚い部屋の片隅で、次の作品の制作に取り掛かるのだ。

誰かが言っていた。「定年退職後、社会は自分を必要としなくなった。しかし、絵描きは違う。自分でモチーフを見つけ、寝食忘れて朝から晩まで制作しなければならない。そしてこれは、死ぬまで続く。良い、悪いは関係ない。絵描きとはそういうものだ」と。

日増しに春めいて来た。桜も、もうじき咲き始める頃だろう。「今年も、〈彼等の分身〉に会えるかしら？」と思ったなら、いつしか、私の頬は綻んでいた。